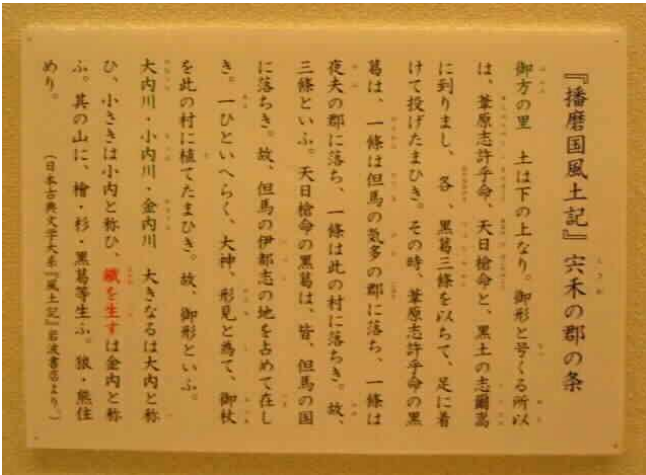


10.

播磨風土記にある鉄の里「御方里」一宮町「三方」を訪ねて

hrmka.htm by M. Nakanishi 2004.6.3.



播磨風土記に産鉄の記載がある御方の里 2004.6.3.

4月に平安末期の製鉄遺跡「安積山製鉄遺跡」を「播磨風土記に記載のある産鉄地」揖保川流域の「御方里」周辺・一宮町として紹介しました。

その安積山製鉄遺跡のところで揖保川が左右の引原川と三方川にわかれ、その右側上流にあたる三方・公文川流域一宮町「三方」が播磨風土記記載の「御形」現在の「御方里」の中心地。

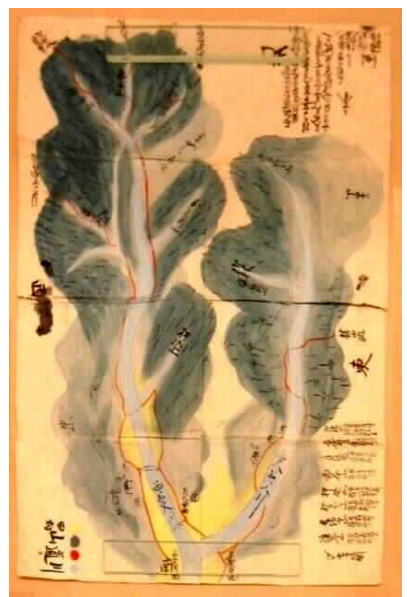
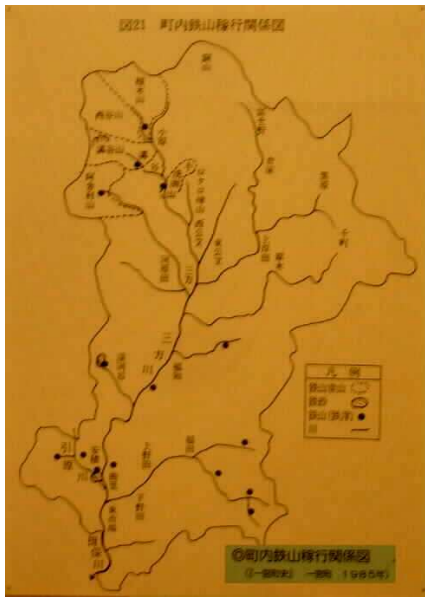
そこには、揖保川の上流三方川山にさえぎられ、三つの谷からの流れに分流する公文川が流れている。播磨風土記にある大内・小内・金内川と考えられてきた。

そして、これら公文川流域にも古くからのたたら製鉄の痕跡が残っている。

山深い里でありながら、三方の扇状地の中央の丘には家屋遺跡があり、縄文・弥生時代から古墳時代へとずっと引き続いて集落があり、古代から中世には寝殿造りの立派な屋敷があり、この地がこの地方の中心地的存在であったと考えられる。

北の山間を縫って流れてきた左 引原川 右 三方川が安積山製鉄遺跡のところで合流した揖保川が山間を南に流れ下る。引原川の奥も三方川の奥もそれぞれ、古い製鉄地帯。またこの引原川流域から山一つ隔てた西が千種川流域の製鉄地帯である。

安積山製鉄遺跡のところから、狭い谷を三方川に沿って北へあがると以外にも奥深い谷筋に沿って広い平野部広がり、その奥は北の山々が壁になっている。この山の幾筋かの谷筋から、川がこの扇状地にながれこむ。ここが三方で、谷は南にのみ開いている。この谷筋が古くは播磨風土記に記載がある産鉄地。また、この谷筋の製鉄地帯は江戸文化元年公文村山絵図として記録が残されている。



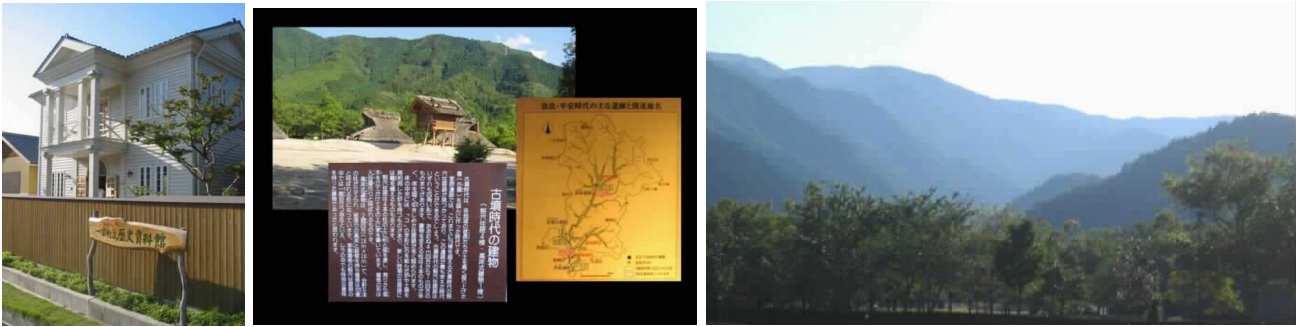
この「三方」の地からはいずれも山越えになるが、西には生野から但馬・丹後へ 北には但馬・伯耆そして、出雲へ 西には千種・美作 そして南には揖保川沿いに播磨へとつながる交通の要衝。

播磨・吉備・美作・伯耆・但馬・丹後と古代日本黎明の時代の中国山地に広がる大製鉄地を繋いでいる場所と見ることも出来る。

古代の和鉄の道の十字路にこの御方里が在ったのではないか・・・
 交通の便悪く中々いけませんでしたが、6月6日の午後やっと行ってきました。

私達が実際に出かけたのは 山崎からまっすぐ揖保川沿いに一宮町を通過して鳥取へ続く幹線国道ではなく、
 もう一つ西へ山並みを越えて、千種から、古代製鉄発祥伝説の地 岩野辺から山を越えて引原川の流域から
 また、直接山を越えて三方に入った。

山から山へ谷をトラバースする道 おそらく古代の和鉄の道 周辺の山々には点々と産鉄の地の痕跡がある
 という山越えの道。今は車1台がやっとの山越えで谷筋から谷筋へ渡る道。古代和鉄のイメージが膨らむ
 山道だった。



一宮町立歴史資料館と家屋遺跡群のある史跡公園 2004.6.3.

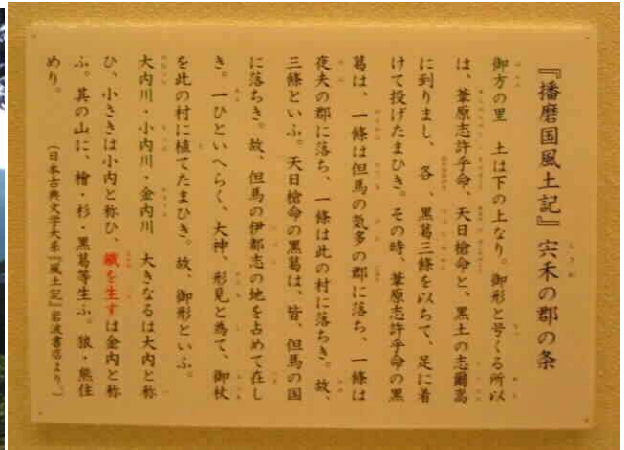
三方の中心の丘には家屋古墳群がひろがっており、周囲の山々が見渡せる。
 ここには一宮町歴史資料館が建ち、縄文・弥生から古墳・古代・中世の住居群が復元され良く整備された
 史跡公園となっている。歴史資料館にはこの一宮町の古代からの歴史並びに播磨風土記に記された古代から
 近年にいたる揖保川流域の製鉄について、安積山製鉄遺跡を中心に企画展示されていた。
 このあたりの古代製鉄については、播磨風土記など伝承はあるもののきっちり製鉄遺跡として発掘調査整理
 されているのは安積山製鉄遺跡のみであり、その調査結果が展示されていた。
 一番知りたかった古代製鉄の三方での痕跡については学芸員の方にも聞きましたが、安積山製鉄遺跡以前の
 遺跡は今もまだ見つかっていないとの事でした。



平安時代末期の製鉄遺跡 安積山製鉄遺跡展示 町立歴史資料館 播磨の鉄 企画展示より

歴史資料館の少し北に行った山裾に播磨風土記に製鉄記事と共に記載があり、製鉄と関係深い大国主命を祭る御形神社がある。

「御形」「三方(三條)」の地名の起こりである。



大国主命を祭る御形神社 2004.6.3.

千種から古代産鉄の地をたどる形で山越えの道をとって播磨風土記の「御方の里」へ入ったこともあり、本当に山また山の山奥にぱっと開けた地に出る。

古代においては表街道だったろう日本海側からくると本当にそんな気持ちになったろう。

そんな明るい地 古代和鉄の街道の十字路でなかったか・・・

後背の山々を眺めながらそんなことを頭に浮かべていました。

帰りは南へ三方川沿いに「御方の里」の中を下って行く。

安積山製鉄遺跡の横へ出て、播磨一宮 伊和神社の森の横をそのまま一宮の町を山崎へ。 気持ちの良い一日だった。

これで 随分長く引っかかっていた播磨風土記の鉄 千種岩野辺・敷草村 佐用・讃容 鹿庭山 一宮・宍粟 御方里 がやっとひとつにつながった。

いずれも 出雲・大国主命の足跡と関係した古代の先進製鉄群。

それらが盛衰を繰り返しながらも 大陸・朝鮮半島の技術を取り入れながらも大製鉄地へと発展してゆく。このドラマがどんなだったのか・・・

今はまだわからないが、千草鉄として日本の刀を支えた播磨の鉄黎明の歴史である。

2004.6.3.

夕日を横目に 揖保川沿いを姫路へ

Mutsu Nakanishi

